座談会「ホスピタリティ専攻」時代を語る

A Reminiscence of the Days of “Hospitality Course”

出席者：清水　均*・二瓶喜博**・横山文人***・岡　久行****
SHIMIZU, Hitoshi・NIHEI, Yoshihiro・YOKOYAMA, Fumito・OKA, Hisayuki
進行：茂木信太郎*****
MOGI, Shintaro

はじめに

【司会】 前回（10月21日），清水均先生を囲んで横澤利昌先生（本学名誉教授）と大江宏先生（同）と３先生で，「亜細亜大学ホテル観光学講座」（以降，「ホテル観光学講座」）時代から「ホスピタリティ専攻」へと展開していく流れを中心として鼎談をしていただきました。特に３先生が1990（平成２）年にアメリカにホスピタリティ教育の実情視察に赴き，様々な貴重な情報や資料をお持ち帰りくださり，その後，現「ホスピタリティ・マネジメント学科」のコアにもなるような帰朝報告書を作成してくださり，全学的にも「ホテル観光学講座」の運営を発展の方向に展開されていったという経緯について伺うことができました。

今日（11月25日）は，「ホテル観光学講座」が継続運営されていく中で，いよいよ経営学部の中に2004（平成16）年に「ホスピタリティ専攻」という学部教育の実態が形成され，やがてその「ホスピタリティ専攻」が母体となって2009（平成21）年に「ホスピタリティ・マネジメント学科」が設置されることとなります。今回は，前回に引き続き清水先生を囲んで，同時代の屋台骨を支えてこられた二瓶喜博先生（当時学部長・現名誉教授），岡先生（当時准教授），横山先生（当時専任講師・現准教授）に加わっていただき，談論風発と参りたいと思います。

私は2009（平成21）年「ホスピタリティ・マネジメント学科」設立に伴って本学に着任しておりますのでそれ以前の様子は存じ上げないのですが，もちろん「ホスピタリティ専攻」が発足するに当たっては，教授会でも全学的にもいろいろな議論があったと思いますし，それ以前に様々なご準備や有り体にいえば軋轢などもあったことも想像できます。しかし，その一方では同時に「ホテル観光学講座」の実績が徐々に大きくなっていくということもありましょうし，OB が育っていってその蓄積といいますか，社会的な力が増す中でそれなりの評価を得ながら「ホスピタリティ専攻」がスタートしたと理解しております。

がそうは言いましても，私も大学人として，一般的にはある意味実社会からかけ離れた大学業界

＊本学経営学部非常勤講師，＊＊本学名誉教授，＊＊＊本学経営学部准教授，＊＊＊＊本学経営学部准教授，＊＊＊＊＊本学経営学部教授

全体の伝統や保守性といった部分も大きなものがあるという事情も承知しているつもりです。そうした環境下で，なにしろ世の中にないもの，“カタカナ専攻”，“カタカナ学科”を新しくつくって，そして「AO 入試」などの新手法も積極的に取り入れながら運営していくわけですから，その過程では当事者ではなければ分からない様々なご苦労があったと思います。この辺りは，本学の正史（『亜細亜大学五十年史』1992年，『亜細亜大学七十年史』2011年）ではあまり語られることもないところと思います。とはいえ，これからの学科の発展を期していくためにはそうした本当のご苦労話が，得難い教訓にもなるところと存じております。

アメリカ視察とその報告会

【清水】「ホテル観光学講座」のスタートは1969年（昭和44年）と伺っておりますが，その後に1989（平成１）年に塩田正志先生（2010年没）との関係で私がこちらへ関与することになります。

塩田先生はイタリアのワインソムリエ協会長をされておられ，僕はどなたがどうしたか知らないのですが，大江先生が推薦をしてくださっていたようです。そして，その年の秋に本校へ伺うなり，衞藤瀋吉学長（1987（昭和62）年２月～1995（平成７）年１月，2007（平成19）年没）に学長室でお会いして，いきなりアメリカ行ってきなさいみたいなお話をいただいて，横澤利昌先生，大江宏先生とアメリカ詣でをした次第です。

その時には安國一先生，塩田先生に成田空港まで見送っていただいて出立し，約２週間，1990（平成２）年３月25日から４月８日まで視察旅行となったわけです。私たちのアメリカ視察のお金は，ほとんど江頭財団（当時財団法人江頭外食産業及びホテル産業振興財団，現公益財団法人江頭ホスピタリティ事業振興財団）から240万円の支援があったようです。

その視察内容は前回お話したとおりですが，その帰国報告会（４月16日）を行いました。先生方がたくさん集まってくださいました。その時は，ワシントン州立大学，ミシガン州立大学，コーネル大学，それからサンフランシスコ・シティー・カレッジなどで集めたカリキュラムや講義の仕組みなど関連情報を含めて僕が知っている限りお話しました。また，衞藤学長ご自身も様々な伝手でアメリカの大学でのホスピタリティ関係のカリキュラムなどをお集めくださっておられ，そうしたご紹介もあったと思います。

僕の「ホテル観光学講座」での授業もこの年からがスタートで，幾つかの講義を担当しましたが，その後も「フードビジネス経営論」は経営学部の専門選択科目になっています。

【清水】 さて報告会では，各学部からも大勢の先生方もいらっしゃって，質問や異論を沢山頂戴しました。約めていうと「ホスピタリティ」なるものは社会科学たるのかということだと思います。いったい「ホスピタリティ」教育を亜細亜大学でする必要性があるのかとか，それは実務であって学問とはならないのではないか，さらには実学はアカデミックではなく関係ない，といった意見が圧倒的だったのです。まだシリコンバレーとスタンフォード大学のお話などなかったころですから無理からぬところもあったとは思いますが。

そこで私は，アカデミックとは何か，何がアカデミックなのかというお話もさせていただき，実際アメリカの大学では，日本でいうところの産学連携というのでしょうか，あるいはより踏み込んだ人的な交流も活発に行われているというお話をさんざんさせていただきました。例えばコーネル大学の教授は，野に下ればフードサービスなり，ホテルなり，食品メーカーなりのバイスプレジデント（副社長）になる，またその逆の流れもあり

で，両者（産業界と学界）は本当に密接ですという話をさせていただきました。そして，そうした交流が常にアカデミズム，学会に新しい情報や問題提起や理論を呼び込んだり創りだしたりする源にもなっていますと。さらには主なカリキュラムがこのようにできていますというお話をお伝えしたり，とにかくそういうことでスタートしました。前回の鼎談はこの誕生話が中心でしたね。

時間軸では，ここからここにいらっしゃるお二人，横山文人先生と岡久行先生が登場するのですね。まず横山先生が赴任されました。

【横山】 はい，そうです。私が1993（平成５）年に本学に着任した時には確かいわゆる改革後の「ホテル観光学講座」でした。その中で「フードサービスビジネス」分野を清水先生がご担当されておられました。それから，観光が福永昭先生，ホテルが池田誠先生でした。

福永先生は「ホテル観光学講座」の運営委員長を務めておられました。

その時に富田勝彦先生もいらっしゃいましたか？

【清水】 富田先生が「国際観光経営論」ご担当でかかわられたのは1999（平成11）年度からですから，かなり後だと思います。

【清水】「ホテル観光学講座」でしばらく続いて，2000（平成12）年度から「ホスピタリティ・ビジネス特別コース」へと展開していくのですが，その時に横山先生が中心となられてコースのカリキュラムをお作りになったのです。

【二瓶】 一飛びに「ホスピタリティ・ビジネス特別コース」に収斂されたというのではなく，その前段階があったはずですが。

【横山】 全学的には「ホテル観光学講座」も並行して残して，横澤先生の「ホスピタリティ特講」科目を開放したりしておりました。

【二瓶】 ああ，そうでしたね。

【岡】 この全学対応方式は，「ホスピタリティ専攻」でも続いていましたね。

「ホスピタリティ専攻設置委員会」での提案

【横山】 福永先生は経営学部の中のホスピタリティ関係の講座をヘッドで担当していらっしゃったのですが，福永先生が2002（平成14）年に本学を離任されるということになりました。福永先生はホスピタリティ学科の設置を強く望んでおられたようですが，当時は叶わなかったのです。

その時の経営学部長は安國一先生でした。教授会で安國先生から様々に問題提起されましたので，これまではホスピタリティ関係は福永先生が中心でいろいろな組み立てをしてきていたのですが，私がカリキュラムなどの提案書を書きますのでそれをご覧くださいと申し上げて「ホスピタリティ専攻設置委員会」というかたちをつくって作成に勤しんだという次第です。

【岡】「インスティテュート」と言っていませんでしたか？

【横山】「インスティテュート」とも言っていました。2002（平成14）年の12月に「ホスピタリティ専攻」設置の企画書を私が提案しています。

「ホスピタリティ専攻設置委員会」には，碓氷悟史先生，岡先生，久我雅紹先生，富田先生，夏目重美先生，二瓶先生，橋本忠昭先生，安國先生，横澤先生，それに私と清水先生。

【岡】 僕は2002（平成14）年９月の着任ですから，そこから入るのです。

【横山】 そうです。「ホスピタリティ専攻設置委員会」での提案の内容に即して「ホスピタリティ専攻」は2004（平成16）年度からスタートします。

この提案書では，ホスピタリティ教育に対する学生のニーズがありますとか，入り口から出口まで一貫した教育体系が求められているので現行の「ホスピタリティ・ビジネス特別コース」では実

施は無理ですとかを書きました。教育の基軸としては，１つは実務的なマネジメント能力の習得で，これは経営学部の科目で習得できますとか，２つ目の基軸はホスピタリティマインドの涵養であることを，そして３つ目として「研修」と「インターンシップ」によって実務現場でコミュニケーション能力を活用できるということも考えました。４つ目としては，語学とビジネスリテラシーとロジカルシンキングの鍛錬です。学習の順番はこれが初めにきます。そこで，さらに演習（ゼミ）は全員必修として少人数教育を実践します。技術系の科目については集中教育で行うということも含ませたのですが，これはできませんでした。

例えばビジネスリテラシーとか，ロジカルシンキングとか，ビジネスゲームとか英会話は，いわゆる工学系の大学のような数週間集中スタイルもありうるとしたのですが，これはうちのカリキュラムの構成からして無理だろうということに……。

【二瓶】　全学レベルで探っても駄目ですね。

【横山】　まあ，駄目は駄目として，とりあえずこのような内容の計画をつくって提案したまではともかく，さて次に入試は「AO 入試」１本だけで実施するといったときには，集中砲火状態，今なら炎上というのでしょうか，全面的にばーって叩かれました。

【二瓶】　私が学部長の時ですので，すごくよく覚えていますよ。

【横山】　会議室で二瓶先生と私が端っこに座って，周りがいわゆる……。

【清水】　四面楚歌では足りなくて，十二面楚歌状態ですか。

【横山】　そうですね。事務の役職者の方々からもどどっと取り囲まれて，という状況でした。

【清水】　衞藤学長もすでに1995（平成７）年にお辞めになっておりますしね。

【二瓶】　衞藤先生はホスピテリティ学の振興にかなり力を入れていたのですか。

【清水】　非常に力を入れておられました。日本の学界では最も理解と造詣のおありの方ではなかったのではないしょうか。さらに「AO 入試」の本来の意味するところも理解があったと思います。

ニュージーランドへの視察とインスティテュートの発想

【二瓶】　話が少し戻りますが，３先生がアメリカに行かれるその前にこのような出来事がありました。ニュージーランドが外貨を獲得するために，語学教育を国で推して進めていきたいということで，衞藤学長のところへ直接関係者が訪ねてこられて，ニュージーランドの７国立大学とポリテクニック（科学技術専門校・工芸大学）とを十数カ所，視察に来てくださいという依頼がありました。そこで竹前文夫先生と私と２人が，ニュージーランドを訪問してそれこそ全土を小型飛行機などで移動して視察調査したことがありました。この話自体は，最終的には結局コスト面で見合わなくて，語学教育を実現することはなくなってしまったのですけども，その時に私は，あわせて，ポリテクニックなどを含めてホスピタリティ関係の教育情報も収集し，設備関係の視察もして参りました。

そこで，帰国後に，本学ではテストキッチンや実習用設備を自前で持つことができませんでしたので，フードサービスやホテルオペレーションの実習をニュージーランドの各大学などと提携して実現できないものだろうかと，衞藤先生に提案したりしました。しかし，この話も実現できませんでした。その理由は２つですね。１つは，コスト問題で，これは止むを得ないところもあろうかと思いますが，もう１つは，アカデミズムを自称される先生方からの賛同を得られなかったことです。やはり実習とアカデミズムは異質であるとか，果てはポリテクニックって何だ，短大か，専門学校かという決めつけで，なにか教育差別のような意

見も少なくなかったようです。

【清水】 固定観念が強かったんですね。

【二瓶】 全部とは言いませんが，そのころはめちゃくちゃ頭が硬かったという印象ですね。とはいえその時の試案や視察情報がある程度の浮力にもなって，反対意見が多少分かれることもあり，アメリカ視察に繋がることになったという流れもあったと思います。だから，ちょっぴりその前の空白を埋めたかたちに……。

【司会】 なるほど，いろいろと地均しの期間とかご努力もあったのですね。

【二瓶】 私自身は，個人的にニュージーランドが好きになりまして，その後，短期ですが数度ニュージーランドに出掛けています。そして，その度に，最初に訪問視察した時の伝手を頼りにホスピタリティ関係のプログラムのある大学などには，誰に頼まれるということでもなく回っていたのです。もしかしたら将来どこで繋がるかも分からないという淡い期待もあったように思います。それでパイプだけは繋げていたのです。まあ，結局このルートは日の目を見ることはなかったのです。

ダニーデンのところとか，クイーンズタウンにある大学や施設などすごくいいところなので，そういうところで学生が集中的に学習するプログラムなどできないものかと思案したわけですが，でも，それは結局正式の検討俎上にのぼることなく，アメリカの視察という話に繋がっていきます。

二瓶喜博名誉教授
「ニュージーランドとの提携話もあったのですよ。実習・インターンシップと英語の一石二鳥でしょう」

あと先ほどの話もありますけど，ホスピタリティ分野を担う専任教員の数をいかに確保したらよいのかが常にネックとなっていました。それでさっきインスティテュート（研究所，附置研究所）という話がありましたけど，当時，立命館大学が試みていたように記憶していますが。

【横山】 そうです。立命館大学です。

【二瓶】 インスティテュートというかたちで，例えば本籍は経営学部に所属して，現住所は（ホスピタリティ）インスティテュートで教鞭を取るという方式ですね。これですと，全学的にも本籍を各学部に置きながら，流動的な人事ができるのではないかと。またそのことで先生方の学問的，学際的交流も推進されますから，学生にとっても教育面でも効用があって，本当はいいと思うのです。だけれども，それが特定の先生にお話をもちかけるとアカデミズムとは異質感があるとか，とくにホスピタリティ分野では対象外だとかそういう現実になってしまうのですね。

【清水】 先生方の反応は意外ですね。

学生の立場からは歓迎されるでしょうね。私の講義でも，特定学部ではなく各学部から受講生が来ており，ある意味で学部の垣根を越えて学べることに学生は喜んでいましたね。また，ホスピタリティビジネス，フードサービスビジネスへの関心も高かったですね，そういう話が聞きたいといって。

【二瓶】 インスティテュート方式がもしうまくいって，先生方がそういうように柔軟に動くことができれば，給与面ではある学部に所属しながら，教育面ではインスティテュートに所属して教えるというかたちで非常に多様なインスティテュートができるはずだったのです。

【司会】　本学にあります「アジア研究所」は，そういうかたちにはなっていないのですか。

【二瓶】　インスティテュートとは違いますね。近いかたちを模索していたのだろうとは思うのですが。現状では研究プロジェクトと市民向け公開講座運営が主力のようですので，独立した学生向けの教育プログラムの機能がないですね。

【横山】　形式的には学部の専門教育と特定目標教育を掲げた本学の「アジア夢カレッジ」が近いかもしれませんが，「アジア夢カレッジ」はいわば中国教育を上乗せするシステムのようですので，実質は違います。インスティテュートの場合は，ここに所属する先生方が各専門学部からかかわるところとなります。いろいろなかたちで各学部の先生方がかかわって役割分担しつつ運営をします。その意味では，学部がフリーライダーにならないのです。

亜細亜大学は，特定目標を特定学部に集約して運営するという考え方のようで，そうしますと，他の学部がフリーライダーとなります。その代わりに，他の学部の意向が掬い上げられないというトレードオフになります。「アジア夢カレッジ」では事実上「アジア研究所」と国際関係学部との連携にとどめられているというのが実態ではないでしょうか。

【二瓶】　そうです。本来のインスティテュートの姿は，要するにまずコンセプトがあって，何を教えたいかというコアがあって，そのために学内のリソースとしての先生方はどのように協力できるのか，という発想になります。これを思い付いたときには本当にいいなと，今でも覚えていますよ。横山先生の研究室で夕暮れが迫ってきて，静かになったところで，「これ，いけますよね」っていう話をして，２人で燃えていた。だけど外に行くと，ぴゅっと消えちゃう。（笑）

【司会】　20年早かったですね。

【二瓶】　なかなかそういうコンセプトは実現できない。

【横山】　なぜなら既存のアカデミズムとの軋轢がどうしても残るのですね。

【岡】　ところで，清水先生は二瓶先生と一緒に学部にはいらっしゃいましたけど，仕事上で接点はおありになったのですか？

【清水】　存じ上げてはいましたけども，仕事上ということになるとあまりないですよね。

【二瓶】　塩田先生からのご推挙というお話は実は今日初めて知りましたが，清水先生が本学着任の時には形式要件がありまして。実はいちおう業績審査を担当させていただいています。

【清水】　そうでしたか。

【二瓶】　私がマーケティング論分野ですので，多分そういう立場での審査委員ではなかったかと思います。当時は自分ではまだホスピテリティ専門領域はあまりよく分かっていなかったですね。

ですから，今でも覚えていますことは清水先生の論文が掲載されている『ホテレス』（『週刊ホテルレストラン』）とか『飲食店経営』とか大判の専門誌ですね，当時のビジネス誌と違って，とにかくカラフルな紙面が多くて，それらをいっぱい読ませていただいて，面白い世界だなと改めて思って，それが最初の接点ですね。余談ですが，今はビジネス誌そのものがカラフルな紙面になってしまって，それらを後追いしているような印象ですね。

「ホテル産業経営塾」での出会い

【岡】　そうですか。では塩田先生が導き役をされたのですね。

僕がシェラトン（シェラトン・グランデ・トーキョーベイホテル・タワーズ）にまだ在籍していた時のことですが，舞浜シェラトンのオープンが1987（昭和62）年だったと思います。その年に早

速に塩田先生が亜細亜大学の学生を連れて舞浜のホテルの見学に来てくださいました。今思えば，「ホテル観光学講座」の学生の見学引率をされていたのでしょう。僕が営業の部長から急に呼び出されて，塩田先生一行のご案内とホテルの説明役を仰せつかりました。

その時に塩田先生にご挨拶して名刺交換しましたところ，亜細亜大学（武蔵野市）とあるので，私の日本での大学時代は吉祥寺（同市）に通学していましたので，「あれ，亜大でこんな講座があって学生をしっかりと教育しているのですか」などやや驚いてお話を始めて，それが出会いでした。その時は，まさか後々に塩田先生のあとに亜細亜大学に勤務することになろうとは露ほどに思っていなかったのですが。

清水先生とお会いしたのは，それから十数年後の2001（平成13）年ですね。私が前職（シェラトン）の時に「ホテル産業経営塾」というホテル業界の中堅幹部を糾合する勉強会を立ち上げました。今の塾長は，昨年本学科を退任された田中勝さんです。当時，『週刊ホテルレストラン』（略称『ホテレス』）元編集長の春口和彦さんに塾長をお願いしたのですけども，その勉強会で定期的にこれはと思う人を講師としてお招きします。その時に既に亜細亜大学で教鞭を取られていた清水さんをお呼びしたのですよね？

岡正行准教授
「昨年本学を退任された田中勝さんが塾頭のホテル産業経営塾でも亜大は話題になっています」

【清水】 はい。

【岡】 ですから，私が清水さんと知り合いになったのは前職の時でしたが，それから１年後か２年後に私が亜細亜大学に移ることになりました。「ホテル産業経営塾」の時に，今度亜細亜大学に行くことになったのでよろしくお願いしますというかたちでしたね。

【清水】 僕は『週刊ホテルレストラン』もその発行元の太田パブリケーションズの役員の方々もかなり以前から存じ上げておりまして，非常に大事にしていただいたというか，いろいろなご縁がありました。そうしたお付き合いのなかで，田中勝先生が僕の書いた『フードサービス攻めの計数』（1994年，商業界）という本をご覧になっておられ，ホテル業界人もこういうことを勉強しなくてはならないといわれて，「ホテル産業経営塾」に呼んでいただいたのです。

【司会】 岡先生は，清水先生とは亜細亜大学に来られる前から既知の仲だったんですね。

【清水】 そうです。多分１年前からです。

【岡】 １年前ぐらいからお世話になっております。私は，亜細亜大学では福永先生が去られた後ですからその後任ということになりますが，実は福永先生とも前職の時に一度イギリスのサリーかどこかでお目にかかっております。

【横山】 そうだと思います。福永先生は，イギリスの国立サリー大学大学院で観光学を学ばれていますから。

【岡】 そうですね，サリーですね。福永先生は，国際観光振興会（現国際観光振興機構；JNTO）でお仕事されていました。その時も名刺交換していたのですけども，まさか私がその方の後任でここに来るなんていうこと，全然夢にも思わなくてね。

【二瓶】 本当に狭い世界ですね。

【岡】 本当にそうです。そして，亜細亜大学での募集に応募してお世話になることになったのですが，その時の学部長が二瓶先生ですから。

「AO（アドミッションオフィス）」入試をめぐって

【司会】 岡先生，着任は何年ですか？

【岡】「ホスピタリティ専攻」ができる前々年2002（平成14）年の9月です。

入ってまもなく「専攻」の立ち上げのすごく大きな議論の渦が聞こえてくる気がしました。私は，企業社会からいきなりきましたので大学の制度や習慣システムなど全然まだ分かりませんし，また企業では，「AO」（アドミッションオフィス）という用語はありませんし，「OA」ならオフィスオートメーションで，あるいは「オン・ジ・エア」（放映）で分かるので，聞き間違いかなとか。でもやはり「AO」なので，何のこっちゃという話で。（笑い）

そうしましたら，本当に冗談も言えないくらい張り詰めたとても厳しい雰囲気で教授会が繰り返され，そうこうしているうちに「ホスピタリティ専攻」の立ち上げの委員会が設けられることになり，横山先生とか二瓶先生と私が頻繁に案練りを重ねるという流れになり，そこに非常勤ではありましたが時々清水先生と富田先生が加わるということになったのです。

その時はまだ二瓶先生がどういう方か詳しくは分からなかったのですけども，教授会と違って，こうですよね，何かあった時はああですよねって自由に議論できましたし，またこれまでの実社会での経験談もきちんと受け止めていただけるので，議論していて気心休まる時にもなっていました。自然と，社会の水を飲んでいる清水さんと話すと，そうだよね，そうだよねって，すごくぱっぱっと分かり合えるところがあったので，気脈が通じてとても気が楽になった感じでした。

たまたまここで見つけたのですけれど，茂木先生もご存じかと思いますが，「AO入試」の時に使っている採点表があります。

【司会】 ございますね。取ってあります。

【岡】 私も前職では人事採用をしていたので，何か貢献しなくてはならないと思って，やっと理解できつつあった「AO入試」の採点表などについては，作ってみますと申し出しました。要するに「AO入試」は，欲しい人材を取るという企業の採用面接と相似形だと理解したのです。

でもいざその採点表を委員会で提示する時には，まだよく周りの方が分からないので，失敗しちゃいけないと思ってびくびくものでした。傍らにおられた清水先生が頼みの綱と思っていたのですが，その時に二瓶先生が，「岡先生，ここの場では安心して出していただいていいですよ」って。（笑）

そんな雰囲気でしたから，新参者で現場にいた私の目からは，忍耐的にも理論的にも「ホスピタリティ専攻」立ち上げの大功労者は，二瓶先生と横山先生で，その支えになったのが清水先生だと刻印されています。

【清水】 いや，私は何にも支えてない。

【岡】 横山さんは，自分は演習（ゼミ）を持たないので，後は岡さんたちに任せるからとよく言われていたのですけれども，専任教員，企業でいえば正社員は私だけで，演習担当と言っても清水先生，富田先生も非常勤ですから，その信頼度も凄いなと思いました。

【横山】 そうですね。清水先生は私が入る前から学生に対する指導とかは存じ上げていました。

【清水】 富田先生は実務的でしたよ。受講生に指導して資格をみんなに取らせるようにしていましたからね。

【二瓶】「ホスピタリティ専攻」がスタートしても大変さは続きますね。「演習」など長いことホ

スピタリティ教育の一番大事な屋台骨のかなりの部分を，清水先生を中心に非常勤の先生にお願いするというある意味異常な状態がずっと続いていくのですよね。何とかしなくちゃ，何とかしなくちゃ，という思いだけではその先に進めなかった。

本当に，岡先生には本学に「入って後悔してるんでしょう？」って聞いた。（笑）「だまされたと思ったでしょう？」って。

【岡】 二瓶先生にはお昼をおごってもらいました。一宿一飯の恩義はありますから大丈夫ですよ。

【司会】 仄聞するところですが，今，全学で「AO 入試」の導入を巡っての検討があるようですが，「AO 入試」というとなぜか大学業界では前向きにとらえられないイメージがあるように感じますね。それが十数年も前に遡っての時期での導入の実現ですから，これまでのお話から想像してもけっこうな騒動があったように思われますが，いかがだったのでしょうか？

【二瓶】 それは凄かったですよ。とにかく聞こえてくる声は，当事者以外は全体が反対という雰囲気でした。最大の反対意見は，偏差値が落ちるというものでした。

【司会】 二瓶先生は当時学部長ですよね。そうすると，学部長会みたいなところでも四面楚歌。それがよく実現できましたね。

【二瓶】 何でだろう。よく分からない。（笑）

【岡】 学部長の二瓶先生のところへある学部から文書で抗議文というのでしょうか，反対意見が届いたと伺ったことがありますが，その時には二瓶先生が横山さんとで協議をして，放っておきましょうとなって，そのままにしておいたという話だったと思いますが，それは，本当のことですか？

【横山】 そうです，放っておきました。教授会の決定ですから，個別対応してもしょうがないですものね。

【二瓶】「OA 入試」も経営学部の教授会で決まったことですし，確か今の対応も教授会で確認しています。

【横山】 だってもう入試の募集は動いていますし，止めるわけにいかないわけですから。

【岡】 僕は，それを聞いた時に，大学の先生でもそういう対応をするのだと，逆に企業社会とは違うなと別の面で感心した記憶があります。

【司会】 ともかく経営学部の教授会では本学で先陣を切って「AO 入試」を実施することの合意がなされたわけですね。月並みな言い方をすれば教授会自治を自然体で貫かれたという言い方になりますでしょうか。それで，その具体的な実施方法なのですが，それには最初から清水先生がかかわられていらっしゃったんですね。

【横山】 そうです。

【清水】 もちろん11月の面接に呼んでいただいて。今と同じかたちです。初めから岡先生がお作りになったシートを評価基準で使わせていただいて実施しました。

【岡】 その時は「AO 入試」定員枠は40名です。形式は今に至るもまったく同じで，第１次試験が「理解力テスト」で，これを通過した人が２次試験に臨みます。２次は面接ですが，これも２日間で２回します。面接に際しては，専任・非常勤を

横山文人准教授

「４年後を見据えたカリキュラムなので，それなら入試からそうするべきだろうということです」

問わずに入学後に演習を担当する先生方に来ていただいて面接官をお勤めいただく。という次第ですので，今思うと前代未聞のオンパレードですよね。

しかし当時は，それよりも学生数を，受験者数を確保したという感動がありました。

【横山】 応募者数173名。

【岡】 その時は40名定員で173名というのがどれくらい凄いか分からない。４倍以上の倍率っていうことで，それでいいのではないですか，なんていう話をして。今思えばやっぱり凄いことだと思います。そこで１次選考って何名ぐらい残したか覚えてないのですけど。

【横山】 80名でしょう。

【岡】 ２次選考に80名残したのですか。11月の２次選考の時には，「アジア夢カレッジ」の専攻と一緒の日でした。ですからいろいろな関係者が，こちらの様子を窺っていて，どんなふうにして選考するのだろう，どんな学生が入ってくるのだろうと，確かに鵜の目鷹の目という様子でしたね。

【司会】 岡先生，けっこうデリケートですね。（笑）

【岡】 それは感じ取りますよ。そういうのを見ていたら早く辞めたいなと思いながら，その時に心の頼りになったのは清水先生たちの存在です。いわゆる「ため口が聞ける人たち」という，そういうことでしたからね。

【清水】 でも「AO 入試」の結果，逆に偏差値は上がったのですよね？

GPA での検証と「理解力テスト」

【岡】「ホスピタリティ専攻」での「AO 入試」選考のやり方がそれなりに認められたのは，１期生が入学後１年経った時だと思います。

石塚隆男先生が入試形態別の「GPA」（グレート・ポイント・アベレージ，履修単位あたりの成績平均値）を教授会に出されました。「AO 入試」選考での入学生は，一般的に学力が低いと看做されていたのですが，その資料では，経営学部の入試形態別カテゴリーの GPA 値で１位か２位だったのです。「AO 入試」は「ホスピタリティ専攻」でしかしておりませんから，イコール本専攻生ということになります。僕はあれで周囲の見る目が大きく変わったのではないかと思いました。

【横山】 そこで解けたのです，「AO 入試」は GPA が低いはずだと思い込んでいる先生方が多いのだと。日本での「AO 入試」は結局，受験生が集まらないからやるところがほとんどで，「AO」と口に出した瞬間に，イコールいわゆる定員割れ，イコールそれを集めるために誰でも入れる，イコール偏差値が低くなる，イコール GPA も低い，という簡単な連想ゲームが働いていたのだと。

【司会】 確かによその大学はそうした経緯での導入が多いですね。ですからこれは大学業界全体で形成された先入観といってもいいかも知れませんね。ただ，あまり表だっていえないかもしれませんが，うちの「AO 入試」は事実上ものすごくきつい一種の学力検査になっています。「理解力テスト」の公表されている過去問題を見ていただければすぐに分かりますが，時事問題，基本的な文章読解，絵図の見方，報道写真とキャプションの適否，図・グラフの見方，数表の判読など，およそ高校の教科書の範囲にとどまらない思考力と理解力が試されています。

【横山】 文部科学省の指導上，推薦入試系は学力テストができませんので，「AO 入試」では何か学力を類推できるような手法はないものかと，岡先生にも相談していたのです。

【岡】 相談を受けて，「英国数とかそういった勉強の試験をしたらいけないので」と横山先生の説明を受けたとき，「何かないか」って思いを巡ら

せて，なけなしの知恵を絞っていたところ，企業社会には「ビジネス能力検定試験」があると思い付きました。それは昔，僕も受けたことがあって，そこには「社会的なことだとか，どちらかというとビジネス能力なのでもっと実務的なのですけども，そういうものだったらありますよ」という話をしました。「いや，ビジネス能力っていうのは18歳の高校生向けではないだろうと」というので，ともかくそれを手掛かりに，誰とはなく「理解力テスト」という言葉をつくったのです。「国語，算数，理科，社会のテスト」ではない，「理解力テスト」。

【司会】 まあしかし「理解力テスト」といってもそれをまた“理解”できないというような議論はあったと想像するに難くないですね。

【岡】 そういうこともなかったとはいえませんが，とにかく結果的にゴーサインをいただいて今日にまで至っています。僕も，これはこれでうまく機能していると思っています。

【横山】 あと「面接２回」についても同様のことがありました。いわく，２回しているところはない，受験生の負担が大きい，同じことを２回も聞くのか，教員・事務方も大変だ，などなど。

【司会】 でも「AO 入試」といったら，本来は２回でも３回でもどんどんどんどんやって，その度ごとにいい人を呼び込んでいったり絞り込んでいったりするというものですよね。

【清水】 私も参加させていただいて，やはり複数回の面接は必要だと実感しています。１日目と２日目とではまったく印象の変わる子がいますので，やはり複数回はやるべきでしょう。「AO 入試」の本質がそういうことであれば尚更でしょう。

【岡】 普通，会社の採用面接を一発で決めることはないわけで，２回は最少回数でしょう。

【清水】 記憶力だけいい人を集めればいいのか，というわけではないということですね。

【司会】 もともと本学は，「偏差値」ではなく「個性値」を標榜しております。その意味では，学業成績の下位者を切り捨てるという「一般入試」の手法よりも，欲しい人材を積極的に採りにいくという「AO 入試」は，理念的には本学の基本方針に叶う入試法ではないかという認識があって然るべきではないでしょうか。

ちなみに，現行の「ホスピタリティ推薦入試」もよく誤解されています。よくある高校からの推薦といった第三者の推薦ではなく，まったくの自己推薦です。「我こそは」と思う生徒が，大部の「課題研究」を仕上げて自己推薦書にして提出しますので，大学生の論文コンクールに出しても受賞するのではないかという代物を見かけたりしていますよ。実際に，地域振興コンクールでグランプリ受賞者も自己「推薦入試」で入学しています。

ところで，清水先生は「ホスピタリティ専攻」になったときに，何か感じられたこととかありますか？

【清水】 僕は端から見ていて，非常にきちんとしたカリキュラムになっていて，しかも基礎学力がきちっとついて，やりやすくなってきましたね。

すごくありがたいなと思うのは，ロジカルシンキングであるとか，あるいはディベートであるとか，いろいろなそういう基礎学力的なところを重視している点です。僕がすごいなと思うのは，覚えるのではなくて，物事の整理の仕方とか考え方とかクリエイティブなことをベースとして教えていただいている点です。私はそれを演習で多用していて，君たちは習ってきているね，じゃあできるよねといって。ロジカルシンキングでやってみようとか，今で言うとマインドマップで書こうとか，プレゼンする前につくりなさいとか，それを提出することによって，今回の課題の総体的なものが見えるから，といったように連動しています。

それから，もちろんマーケティングの手法も使わせてもらっていて，前回もお話したように，「SWOT（強み，弱み，機会，脅威）分析」を習

ったか，じゃあ今回の業態開発に「SWOT 分析」を必ず入れなさいとか，「参入障壁」がどこにあるのだとか。経営実務的な語彙が比較的容易に使えたり理解できるところは，授業の内容を深めることに効用があります。

【司会】 そういう意味では経営学部のいろいろな科目の中に「ホスピタリティ」ビジネスを構想するツールがあって，それら経営学の基礎的な知識を習得しながら，フードサービスの実践的な授業ができるということですね。

「ホスピタリティ」に魅かれる学生

【司会】 ところで，学生の様子についてはいかがですか。

【清水】 優秀な子がいるし，入ってから伸びる子が結構いますね。今いる学生もそうですよ。

たまたま僕なんかもそうだけど，高校の時に何らかの事情で勉強が嫌いでやらなかった。（笑）大変失礼ですけども，亜細亜大学で「ホスピタリティ」という切り口だったら面白いじゃないかといって来るのですよ。将来性のある層を見つけようということは，多分ある意味で「AO 入試」，「推薦入試」があるのでできることで，彼らの潜在的に持っている能力は高いと思うのです。それから，「ホスピタリティビジネス」を看板にしているので，みんなホスピタリティマインドを持っていますよ。それはすごく貴重で有り難いことです。

【横山】「ホスピタリティ・マネジメント学科」では，一般入試も追加されて，入試形態も多様化しましたので，その点は少し変わったかも知れません。

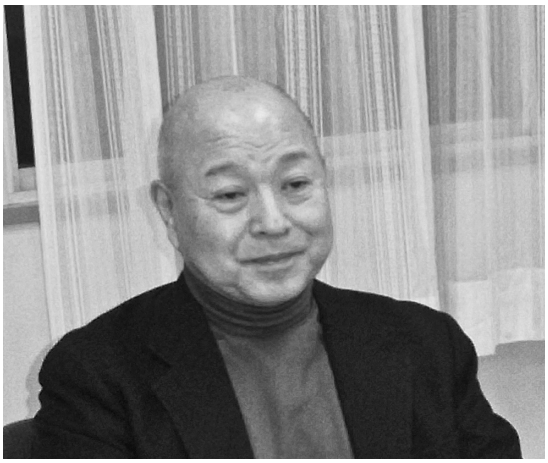
【二瓶】 そうです。入試形態が広がって「AO 入試」だけではなくなった時から，どうも変わってきている部分があるかなっていう気がします。だから難しいですね。善し悪しですね。

【司会】 別の意味ではお互いに刺激を受けあっていますね。

【岡】 僕，今でも覚えているのは「ホスピタリティ専攻」=「AO 入試」１期生の女子学生 O です。面接の時の志望理由で，どうして来たのと聞いたら，「私のお父さんが清水先生の大ファンです」と。お父さんが清水先生のお弟子さんか教え子で，亜細亜大学でこういうことをやるので行けって言われたって。それで，「AO 試験」の「理解力テスト」と「面接」２回の計３日間を通って入学してきました。

１期生を募集する時は，当然どれだけ学生が来るのかという，心配半分，期待半分のような複雑な心理状態なのですが，こういう受験生がいるととても救われた気になって有り難いですよ。大変失礼ながら告白しますが，その時に，清水先生をあらためて見直したといいますか，凄いね，こういう人たちと一緒に仕事ができるのは嬉しいし，楽しいよねと心が躍りました。

【司会】清水先生はご健筆で，あちらこちらに依頼されて寄稿されています。「商業界」の『飲食店経営』では毎月連載ですね。その時に亜細亜大



清水均非常勤講師

「OB・OG たちとのネットワークが実業界で広がっているのは楽しいですね」

学講師という肩書きで書いていただいています。いろいろな業界セミナーの看板講師でもありますし。

ですから清水先生ブランドは亜細亜大学だと，そういう肩書きが業界に刷り込まれていますので，業界から見た時も亜細亜大学という名を目にした時に，フードサービスやホスピタリティ教育をしている大学だというイメージがあります。

逆に，清水先生には，何かそういうことの業界からのリアクションみたいなことはございますか？

【清水】 やはりお客さま（クライアンアト）に安心感があるようですね。ご紹介いただく時に大学の講師もしているということが，呼んだ側は安心感があるというか，間違ったことはしていないだろうみたいに思われるようですね。

【岡】 フードサービスもホテルも似たようなところはあるのでしょうけども，大学という存在は確かに１つの安心感というものが実際にありますね。

【清水】 今のＯという女性は広島の世羅というところで，お父さんがＴというお店をしていらっしゃいます。そういったことで来てくれたのです。彼女は結局お店を継ぐのですけれども，その前に飲食とクラブなどを経営している広島の有名な外食ビジネスの大きな会社にお願いして預けまして，そうしましたらいろいろな業態を体験させてくれたり，早くにマネジメントスタッフに就かせてくれたりして，修行させてくれました。そういうことでは有り難いですよね。

二瓶先生のご自宅の近くになりますか，市川の鉄板Ｓというお店は，僕にとっての卒業の２回生がやっています。ソムリエの資格を持っていますし，そこへ行っていただいて応援もしていただいて。

【岡】「ホスピタリティ専攻」の２期生。ここに入学の１期生，２期生，３期生の名簿があります。イメージ的には，フードサービスに行った卒業生は活発な子たちが多かったですよね。

【清水】 1991（平成３）年の中にＳがいますね。最初は「そごう」でしたが，今は外資系のＭジャパンの常務で関西支社長です。

【司会】 清水先生は二十数年間，亜細亜大学に精勤していただいて，何かご不満とか苦情とかありませんか？

【清水】 何はさておき「アカデミック」な議論に終始して，そこから進もうとしないということでしょうか，僕は，まあその代わりに本をいっぱい書けたからいい。（笑）

【司会】 あと何か聞きたいことありませんか？

【岡】 自転車はまだされていますか？

【清水】 自転車はしばらくやっていません。僕はリウマチになって，胆嚢炎になったのです。３年前の夏ですね。でもおかげさまで手術する時はいつも３月とか８月とかですので，学校に迷惑をかけてないのですね。今，また元気になりましたから。

でも，そこから自転車は乗れてないですね。

【清水】 マウンテンバイクは始めています。山は乗りませんけど，坂ぐらいはギアが小さいから楽です。ロードバイクより。

【岡】 清水先生の自転車の影響を受けたのが田中勝先生です。電車で３人一緒に帰る時に，武蔵境から吉祥寺までの間，本当に２駅ですよね。その間で清水さんが田中さんに自転車のことを話した。そうしたら翌週，田中さんはバイク買った，ヘルメット被ったとかいっていました。

【清水】 ニュージーランドもいいところですね。僕はマウンテンバイクを乗りに行くのです，元気な時は。ロトルアへ。

【二瓶】 ロトルアのポリテックの学長には，ニュージーランドでいろいろ案内していただきました。

【清水】 今のニュージーランドの話はいい話ですね。探検部がありますね，けっこう僕の演習生が連綿としてそこにいて，今はカナダに行ったりし

ていますけれど，彼女たちはそこで何しているかというと，水上スポーツをしているのですよ。ニュージーランドとかオーストラリアとかで，キャニオリング（渓谷下り）とかマウンテンバイクとかカヤック（カヌー）とかいろいろしているの。

ニュージーランドの何がいいかというと，いわゆるアウトドアの学校がけっこうあって，有名なアウトランドスクール（辺境地）もあり，観光でもアウトドアツーリズムがこれからすごく大事になってくると僕は思っていて，学生もそうした繋がりやネットワークが生まれる可能性も大きいと思うのです。それから，語学留学でも費用的にもそんなに高くないでしょう。

ところでたまたま先週，女子栄養大学のある先生とお話する機会があって，いろいろな問題提起をいただきました。

１つは「今の学生の，特に女学生の体重が少なすぎて，碌なものを食べていない，このままの貧食を続けると妊娠して子どもを産んだ時に，碌な子どもが生まれてきませんよ」といわれました。今の食の危険なことに気がついていないということが１つ。

それからもう１つが，うちの学生もそうではないかと仰っていましたけど，貧乏問題ですね。携帯電話やスマホに金を使い，日常的にすごく金がない。そのためにバイト漬けにもなり授業が後回しになる。しかも奨学金を手当てするので，いざ社会人になった時には多額の返済義務を背負ってのマイナススタートで，例えば10万円毎月借りれば……。

【司会】 今の奨学金は，奨学金ではなく，借金そのものです。

【清水】 うまいこと言いますね。借金です。それが大問題。

それから，「親がとにかく大学だけは入れる，入った後は自分で授業料も生活資金も自前調達だということで，大学に籍こそあっても事実上通学に困難な学生が沢山入学している」というお話をされていました。それは同じようなことがけっこうあって。

【司会】 それは，大学業界全体の問題ですね。というよりも現在の日本社会の大きな問題です。

【清水】 そうです。業界全体の問題で，僕のあずかる学生にもおります。ですから，われわれも食を扱う以上，そういった栄養学的なこともう少し啓蒙していかなければならないと考えています。

ホスピタリティトレーニングルームのこと

【岡】 清水さんがアメリカに行かれて，二瓶先生がニュージーランド，横山さんもミシガン，茂木先生もご存じでしょうけども，今後を考えた時に，例えば私が行ったウィスコンシンでも，アンダーグラジュエート（学部教育）でホテル，レストランとか，HR（ホテル＆レストラン）という言い方をしています。

私の友人だとか卒業生とか，まず絶対言うのはホテルとかフードサービスとかレストランとか名乗る時に，マスト（必置義務）は施設があることです。施設がないと，アメリカでは名乗ることがおこがましい，あるいは名乗りを上げられないということになります。ところが亜細亜大学には黒板と白墨という状況です。

私が行った時もアンダーグラジュエートでも，レストランはあるし，ケータリングもやります。自分たちでそこで実際肉をいくらで買って，包丁を握って，サービスはどうしてと，ということはとにかく当たり前の話です。

アメリカだけではなく，私のルームメイトだった台湾の大学でもそのようで，シンガポールや香港も全部共通です。それを日本でというのはなかなか難しいのです。少し前に本学の ASIA PLAZA（学生食堂兼コミュニケーションプレイ

ス，通称アジプラ）ができる時にそうした施設を併設するという考え方があったのですが。

【司会】 確かにそのためにテストキッチンや模擬挙式なども実施可能なコンセプトと図面を携えて提案書を書き，全学的に設置されていた食堂委員会に届けはしましたが……。

【岡】 ある程度理解くださる方もおられますが，予算的な問題もあるのでしょう，最後まではいかないですね。結局，これは亜細亜大学だけの問題ではないと思います。

【横山】 何かアカデミズム偏重っていうか，そちらにウエートがかかりすぎている気がします。私は大学では総合大学でしたけれども，大きく人文系，社会科学系，工学系という分類でくくられ，あとは医学，体育，芸術という分類でくくられ，後者のいわゆる医学，体育，芸術は職業直結型（プロフェッショナルスクール）と看做されていました。

ですから，それだったら私はこのホスピタリティ・マネジメント学科は，亜細亜大学の中での亜細亜プロフェッショナルスクールでいいと思っているのです。

【岡】「ホスピタリティ専攻」時代に学科に移行しましょうという理由の１つは受験生がきちんと集まっていることと，卒業生の就職が順調だということがあったのですが，これらに陰りが出てくると，いろいろと違う方向での議論も頻出するのではないかという気がしています。

【司会】 僕は学科の設置に伴って外からこちらに来たせいか，あまり感じないですけどね。（笑）鈍感なのか，皆さんの実績のおかげなのか。もちろん異質な環境ではありますから，最初は慣れるまでいろいろありましたけれど，でも仰られるように受験生が増えているとか，それから就職がいいということは，要するに社会的ニーズがあるということでしょう。だから堂々としていればいいのではないかと思っていますが。

カリキュラムは，「実習」や「インターンシップ」が必修で組み込まれていて他の学部と異ならざるを得ないところがありますが，むしろ事務の方々からは，そうしたいろいろなイレギュラーな場面でもすごくよくしていただいていると感じています。

【二瓶】 よくいえば，何事も先駆けて行うと，現場がどう対応していいか分からないということでしょうから，そういう意味ではかつては事務方の対応にリアクションがなかったですね。

【岡】 ホスピタリティトレーニングルーム（グループワークに使用できるように整えたスペースで，専用の書架や資料棚を置き閲覧自由とする）の掃除は自分たちでしていました。

【清水】 ホスピタリティトレーニングルームの確保は有り難かったですね。今でも非常に有効に使っています。

【横山】 これの設置も本当に大変でしたよね。

【司会】 先ほども触れましたが今年（2015年３月）竣工したASIA PLAZA（アジプラ）の「多目的ホール，コミュニケーションスペースやグループワークなどができるようにボード，プロジェクターやパソコンの備えもある４階建ての新学生食堂棟」というコンセプトも，ホスピタリティトレーニングルームという先行モデルがあればこそ提案できたのではないかと思います。

【岡】 そう言っていただければ管理を続けた甲斐もありますが，当初はゴミの片付けから，窓閉め，鍵の未返却対応まで，何かある度に，その都度僕が行って対応していました。その度に張り紙をしたりと，今から思うと本当に笑い話のようなことがしょっちゅうでしたね。

【横山】 ホスピタリティトレーニングルームは，グループワークをするために，どうしても必要な施設だったのです。「オリエンテーションゼミナール」でも「ビジネスリテラシー」でも他の科目でも課題を出すのですが，それにすべてグループ

ワークが伴うのです。

高校生からいざ大学に入学してきたところでまだ勝手が分からない時に，基本から課題を出すのですが，その時に変なサボり知恵がついてしまうと駄目なのです。グループワークはそのためにも有効なのですが，そのための部屋がなかったのです。当時，図書館には１ヵ所あるにはあったのですが，そもそも図書館でワイワイガヤガヤ甲論乙駁では，声も漏れますし，スペースも足りませんから，最初は図書館から苦情が来ました。「ホスピタリティ専攻の学生がうるさい！」って。ところが，よくよく聞いてみると勉強の話で盛り上がっているようだと。それで事情をお話したら，図書館のスタッフの方々もよく理解してくださって，後押ししてくださるようになりました。夜まで勉強で議論を続けるのは，開学以来だって言われましたから。

【司会】　見る人はちゃんと見てくれているのですね。

【横山】　そうです。

【岡】　ホスピタリティトレーニングルームは，もともと教室だったところを改装していますので資金も要したのです。ですから「ホスピタリティ専攻」専用室という訳にもいかないという事情がありますが，それがちょうど全学を対象とした「ホスピタリティプログラム」の開設と重なり，同プログラム＝全学のための施設だという位置付けができました。

【清水】　ホスピタリティトレーニングルームは学生同士の縦横のコミュニケーションを担保する場になっていて，いい意味で伝承ができています。もっとも勉学のことだけではありませんから，どこどこの科目は単位が取りやすいぞとかそういう情報も飛び交います。でも，先輩，後輩とかの遣り取りもありますから，大学で空間的に居場所があるということは，大学に行こうというモチベーションにも寄与していますよ。

【横山】　仲がよくなりますね，やっぱり。

【岡】　こうして「ホスピタリティ専攻」の実績もそれなりに上がり，ではいよいよ学科の設置に漕ぎ着けようという話になってきました。ところが大学ではものごとは４年サイクルになっていますよね。大学内のコンセンサスを得ることもなかなか前に進みにくかったように思います。結局早くても……。

【司会】　５年かかりましたね。

【岡】　５年。僕からすると１年プラスになったという思いがあります。

【司会】　いやいや大学業界で「プラス１年で実現！」は，驚異的なことですよ。こうして，現在の「ホスピタリティ・マネジメント学科」の誕生に至るのですが，そこからの歩みも試行錯誤の連続のような気がします。いずれにしましても，生みの苦しみは毎回続くものなのだということを肝に銘じてこれからを乗り切っていきたいと思っています。そしてこの間４半世紀以上にわたっていつも清水先生に支えてきていただいたこと，みな心底から感謝しております。

今日は長時間にわたり貴重なお話を頂戴しみなさま有り難うございました。

編集委員注

本稿は，2015年11月25日18時より本学内で行われた４先生による座談会の記録である。テープの素起こし稿を元に，編集委員（安田・茂木）で多少の調整を施した。主な調整は，口語的な言い回しを整えたこと，重複あるいは短絡表現になるところを加除したこと，学内者以外の固有名詞（個人・企業名）はイニシャル表記としたこと，小見出しを付けたことなどである。発言者の意図を損なわないことを願っている。文責は編集委員にあることをご了解されたい。